北利根橋

須田三郎
え・須田マリ

影書房

須田三郎（すだ　さぶろう）

1929年、茨城県生まれ。横浜市大卒。1987年末、東京新聞を定年退職。そのあと児童読み物の創作に専念。短編集『北利根橋』は処女出版。横浜市在住。

須田マリ（すだ　まり）

1929年、千葉県生まれ。佐原高女、女子美卒。中学、高校教員を経て現在児童画研究。

北利根橋
©1990　Suda Saburō／Suda Mari

1990年11月30日　初版第1刷

著者　須田　三郎

定価1,236円
（本体価格1,200円・税36円）

発行所　株式会社　影書房
発行者　松本昌次
東京都豊島区駒込1－34－2　ヒルクレスト駒込909号
電話03－946－3611～2　FAX03－946－3612
振替・東京7－85078
本文・装本印刷＝形成社印刷株式会社
製本＝美行製本

落丁・乱丁本はおとりかえします。

須田三郎　え・須田マリ

北利根橋

影書房

江苏工业学院图书馆
藏书章

北利根橋　もくじ

わだちの詩……五
水神さま……四三
小さな銀の盾……八一
北利根橋……一一三
あとがき……一六〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

わだちの詩（うた）

1

村はずれのだらだら坂は、椎の大木がかぶさって真昼でもうす暗い。せまいデコボコ道だが、隣村に通じる近道だから、よく荷馬車が行ったり来たりする。そのたび、車輪がずっしり土にめりこんで、道の両端にわだちができた。

ペダルをふんできたおれは、坂にさしかかると自転車からおり、押してあるいた。

ここを通るときは、だれもうすきみ悪がった。でも、坂のてっぺん近くに荷馬車が一台ゆっくりのぼっていくのが見えた。それでおれはホッとした。

「はいよう、どう、どう」

しわがれた声が坂をかけおりてきた。

荷車に、わらのムシロやナワをわんさと積んで、子どもが一人、あと押しをし

ている。

馬は、たてがみを波うたせながら「ヒ、ヒーン」と、いなないた。

「あれっ、あの荷馬車、動けねえのか」

おれは、ちょっとようすがへんだなと思った。やっぱり、荷馬車は深く落ちこんだわだちに車輪がはまって、立往生していた。

「ほらよーっ」

こんどは、力んだ鋭い声がひびいた。あと押しの子どもだ。どこかで聞いた声だな。

よれよれのはんてんにひもをしめ、むき出しの足にわらじをはいてふんばる小さい後ろ姿——頭の後ろに一銭銅貨ほどのハゲがあって、それは、まちがいなくタツジである。

「なんだ、やっぱしタツジでねえか」

声をかけられ、ひょいと後ろを向いたタツジのほうが、かえっておどろいたよ

うすだ。
「三太か、なんでこんなとこさ」
「う、うん。自転車おぼえたからな、おめえんとこの近くの親せきさいくとこだ」
「道、ふさいじゃっただな」
「いいよ、いいよ。だけんども、たいへんだな。おれも手伝うべ」
おれとタツジは〝日支事変〟（日中戦争・一九三七年）がおこる前の年に入学、毎日机をならべてきた仲だ。この春休みがおわると五年生になる。だけどタツジは口数がすくなくて、おなじ教室にいても、いつも一人ぼっちだった。
タツジのおとっつぁんが、おれに気がついて、後ろを向いてどなった。
「タツジ、友達か」
真っ黒いヒゲだらけの顔だ。
「あと押し手伝ってくれるだと」
タツジがいった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「そらぁ、すまねえこったな。そんだら、車輪ば巻いてもらうべか。このわだちのあなっこば上がりさえすれば、あとは、もうでえじょうぶだからな。だけんど、気ぃつけてやってくんな」

おとっつぁんは、ぎこちなくあいそ笑いをした。

タツジは左の車輪のそばにおれを呼んだ。

「そんだら、三太、こうやって車ば巻いてくれや」

といって、車輪の放射状の支え棒をにぎり、両足をふんばって押して見せた。

そのとき、おれは「おやっ」と目を見張った。タツジは、左手を、いつもズボンのポケットに入れていて、ほとんど見せたことがない。それなのに、いま、両手で支え棒をにぎっているではないか。

左手はかくしだてもせず目の前にあった。親指と三本の指だけが支え棒に食いついている。小指がない――。だれからともなく聞いて知ってはいたが、ギョッとした。おれのほうが、見てはいけないものを見た後ろめたい気持ちになった。

「せーのー、よいしょ」
「ほらっ、どうどう」
おとっつぁんは、手綱で馬のしりを「ビシッ」とたたいた。そして、馬の横っ腹にある荷車の引き手をかかえてひっぱった。
おれも左の車輪に精いっぱい力をいれた。
「ギー」と、車輪はやや動くけはいを見せたが、もうひとつというところで戻ってしまった。
おなじことを三回くりかえすと、さすがに息がきれた。
「よーし、ひと息いれべや」
タツジのおとっつぁんがいった。
三人とも椎の木の、もりあがった根っこに腰をおろして、汗をふいた。
「タツジがいつも世話かけてんだべな、学校で。すまないね」
おれにこういうと、おとっつぁんは手ぬぐいを巻いたままの頭を下げた。

「たしか、村役場の助役さんとこの坊やでがしたね」
と、顔を近づけていった。プーンと酒がにおった。
おれは、びっくりして「はい」といった。
「なんだ、おとっつぁん、知ってたのか」
タツジも意外のようだった。
「ああ、知ってたとも。どうだタツジや、いま、なつかしい歌思い出したよ。ちょっと歌ってきかせっから、きいててくれや」
なにを思ったのか、タツジのおとっつぁんは、まるで酔った人のように歌い出した。

どこまで続く　ぬかるみぞ
三日二夜を　食もなく
雨ふりしぶく　鉄かぶと

いななく声も　絶え果てて
倒れし馬の　たてがみを
かたみと今は　別れ来ぬ

しぶいのどから流れ出る歌声が、木々の間にしみこんでいった。父親たちが好んで口ずさんでいる軍歌「討匪行」だ。

暗くものがなしい調べのあとに、温かい余韻が長く尾をひいていた。

「支那（中国）大陸で〝匪賊〟と戦った兵隊さんの歌だ。十五番まである長

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com